

白い影

小川未明

青空文庫

なつひ 夏の日のことでありました。汽車の運転手は、広い野原の中にさしかかりますと、白い着物を着た男が、のそりのそりと線路の中を歩いているのを認めました。

このあたりには人家もまれであつて、右を見ても左を見ても、草の葉がきらきらと、さながらぬれてでもいるように、日の光に照らされて光つていました。また、遠近にこんもりとした林や森などが、緑色のまりを転がしたようにおちついていて、せみの声が聞こえていました。

白い男を見ると、運転手は、ハツと思つて、あわただしく警笛を鳴らしました。なぜなら、汽車がちょうど全速力を出して走つて、いたからであります。

しかし、白い男は平氣で、やはり線路の内側を歩いていました。もうすこし早く、これを見つけたら、こんなに運転手は、あわてることもなかつたのでしようけれど、このあたりはめつたに人の通るところでなし、安心をして、彼は前方に見える遠い国境の山影などをながめて、その山の頂に飛んでいる雲のあたりに空想を走らせていましたのであります。

白い影は、もう、二十間……十間……すぐ目の前に迫りました。運転手は大急ぎで

進行をしている汽車を止めました。その反動で、どうしたはずみにか、列車は大脱線をしてしまいました。おりよく、それが貨車であつたからたいした負傷者はなかつたけれど、貨車は幾台となく壊れて、田の中に埋まつたり、堤防の上に転覆したりして、たいへんな騒ぎになりました。

運転手は、負傷をしました。そして、うめきながら、白い着物を着た大男をひき殺したと告げました。

それで、みんなは、汽車の転覆の原因が、人をひき殺そうとしたため、急いで汽車を止めたのにあつたことを知りました。それにしても、こんな大事件をひき起こした男は、どうなつたかといつて、みんなは、汽罐車の下をのぞいてみました。そこには白い着物を着た男がひき碎かれて血みどろになつてているだろうと思いましたのに、なんの姿もありませんでした。

「白い男なんて、いないじゃないか？」

「どこにも人間はおろか、ねこ一匹だつてひかれていいはしないじゃないか。」
みんなは、こう口々にいました。そして、これはまさしく運転手が、むだ目を見たのだといいました。

あくる日の町の新聞には、運転手がむだ目を見たために、貨物列車を脱線させてしまつたことを大きく書いていました。そして、運転手は、このごろ、神経衰弱にかかりついていたといふこともつけくわえて報道しました。

すると、ここに、白い着物を着た大男が、その後も真昼ごろ、のそりのそりと線路の上を歩いているのを見たというものがありました。なんでも、その人の話によると、雲をつくばかりの大男であつたというのでした。

こうした奇怪な話は、これまでに、二度めであります。この鉄道線路は、西南から走つて、この野原の中でひとうねりして、それからまつすぐに北方へと無限に連なつてゐるのでした。

この前この地方に、稀有な暴風が襲つたことがあります。そのときは、電信柱をかたつぱしから吹き倒してしまいました。高い木は折れ、家は倒れ、橋は流れてしまつたので、じつに、天地は真っ暗になつたのであります。人々は、そのときの恐ろしかつたことを今まで記憶しています。やはり、その当座、一つのうわさがたちました。

なんでも、暴風は、黒い太い棒になつてうずを巻いて過ぎていつた。あの暴風がくる前、灰色の着物を着た、見上げるばかりの大男が、この鉄道線路の上をのそり

のそりと歩いていたのを見たものがあつたというのであります。それで、このたびも運転手が、白い着物を着た大男が、線路内を歩いているのを見たといったことが、かならずしも、むだ目ばかりでないといって、みんなに不安を抱かせたのです。

線路は修繕されて、やがて列車は、今までのように往復するようになります。その後になつて、ふたび同じような事件が繰り返されました。

もとより、これは、別な運転手で、もつと年をとつた熟練な男であります。その汽車には、大臣とたくさん高等官が乗つていきました。この野原にさしかかると、汽車はしきりに警笛を鳴らしつづけましたが、不意に、停車場でもないのに止まつてしまつたのです。

「どうしたのだ?」といつて、みんなは、客車の窓から頭を出して、外をのぞきました。運転手や、その他、汽車の勤務員は、車内から飛び降りて、前方の汽罐車の方に向かつて駆けていきました。

「ひいたな?」と、客車に乗っている人々は、頭を出して、その方を見ながらいいました。

また、一等室からも、大臣や、高等官の顔がちよつとばかり現れました。しかしその人たちの顔は、じきに引っこ込んでしまいました。けれど、内部では、やはり他の客車に乗っている人たちと同じようなことをいつて、うわさをしていたにちがいありません。

「不思議だ！」という声が、あちらにも、こちらにも起りはじめました。

「いつたい、どうしたことかな？」と、大臣は眉のあたりをしかめて、おそばのものにたずねました。おそばのものは、さっそく、汽車の監督を呼んで、子細をさらにたずねたのであります。

監督は恐縮して、いまあつた事實を答えました。

「線路内を歩いていくものがありますから、笛を鳴らしたのです。」

「その笛の音は私も聞いた。」と、シルクハットをかぶつた高等官はうなずきました。

「歩いている人間は、耳が聞こえないとみて、いつも平氣で、汽車が後からくるのを気づかなかつたのです。しかたがないのですから汽車を止めました。しかし、そのときは、もう遅かつたか、歩いている人間のそばまで汽車が走つていきました。」

「ひいてしまつたのか？」しかし、前後の事情を聞けばしかたがないことだ。」と、高

等官はいました。

「いえ、ところが、線路の上にも血が流れていず、またあたりにも、その人間の影が見えないので。」

「どんなようすをしていたのか？」

「やはり、白い着物を着ていたといいます。」

こう答えて、監督は、高等官の顔を仰ぎました。

「最近、汽車が脱線したときも、それだつたじやないか。また、運転手がむだ目を見たのではないか。」と、高等官はいました。

「今度は、二人も、三人も、白い着物を着た男を見たものがあるのです。」と、監督はあまた頭をかしげながら答えました。

おそばの者は、このことを大臣に申しあげました。すると、大臣は、大きな体をゆすつて、

「このたびは、脱線をしなくて、命拾いをしたというもののじや。」と、驚いたような、喜んだような顔つきをしていました。

大臣の乗つていた列車が、途中不時の停車をしたというので、また問題にな

りました。そして、あくる日の町から出る新聞には、運転手が、どうしてこのごろ、こうむだ目を見るのか？ 気候の変化で、もしくは、過度の労働でみんな神経衰弱にかかつてているのではないかという疑いを起こしていました。

その後は、汽車が進行してくる際に、たとえ線路内に、子供や老人の影を見ましても、運転手は警笛を鳴らさずに進行をつづけることがありました。

「これも、きっとむだ目であろう。」と、彼らは思つたからであります。

たちまち、責任問題が起きました。轢死者の数が著しく増したからです。なぜ、警笛を鳴らさなかつたか？ 被害者の側では、こういつて、鉄道側を非難いたしました。

した。

白い影は、鉄道線路を伝つて、ついに街の方へやつてきました。こんどは、街のあちらこちらで、白い影のうわさが盛んになりました。

「今日、向かいのご隠居が、取引所で、白い男がみんなの中に混じつて見物していきよ
たといわれました。それで、昼過ぎからの株がたいへんに下がつて、大騒ぎだつたそ
ですよ。」と、あるところでは、おかみさんが近所の人々に話をしていました。
「白い男つてなんぞございますか？」

「白い着物を着た、氣味の悪い男だそうですよ。」と、おかみさんは答えました。
 そこへ、ちょうど隠居が通りかかりました。二人の女は、おじいさんを呼び止めました。

「おじいさん、あんたは、白い男をごらんなさつたのですか。」と、一人の女はたずねました。

「めつそな、わたしが見たら、いまごろは破産せんけりやならん。白い、氣味の悪い目つきをした男が見物人の中に混じつて、じつとしていたということでな。なんでもその男を見たものは、みんな株に損をしたという話じや。」と、おじいさんはいいました。

ある日、街の四つ角のところで、電車と自動車とが衝突しました。自動車はもはや使用されないまでに壊され、電車もまた脱線して、しばらくは、そのあたりは雜踏をきわめたのであります。そして、怪我人もできましたので、電車と自動車の運転手は、警察へいつてしらべられることになりました。

「どうして、衝突をしたのだ？」といって、警官がききますと、自動車の運転手は、そのときのことを思い浮かべるような目つきをして、
 「晩方であります。両側には、燈火のついたころあいです。電車の停留

「場には、たくさん人が立っていました。私は注意をして、それらの人たちを避けながら走っていますと、目の先へ、小さな白い着物を着たおじいさんが、ちよこちよこと出てきたから、私はとつさのことですし、たいそう狼狽しました。その前まで、そんな老人が歩いていることに気づかなかつたのです。私はひくまいと思つて、全速力で脇の方へそれますと、そのとたんにやつてきた電車と衝突したのでした。」と申しました。

「その着物を着た老人はどうしたか？」と、警官はききました。

「不思議にも、その間に老人の姿は消えたように、どこへいつてしまつたものか見えなくなりました。」と、運転手は答えました。

「おまえの見た、白い着物を着た老人というのは、大男ではなく小さかつたのか？」
警官は、これまで、大きな白い男が、影のように線路の上に立つて、幾たびか汽車を脱線さしたり、また止めたりしたといううわさを聞いていましたから、いま小さな白い男だと聞いて、異様に感じたからであります。

「私たちの見たのは、白い小さなおじいさんでした。」と、両方の運転手は、はつきりと答えました。

「いつ、そんなに小さくなつたのか？」と、警官は、くびをかしげました。

「そのことは、私たちに、わかりません。」と、運転手は、おそるおそる答こたえました。
 この白い影が、この町に入つてきたことは、どんなにみんなの生活の上に不安を与えふあんあたえたであります。ほんとうに、ペストや、コレラが入つてきたよりもおそろしい、防ぼうぎ禦よのできない事実じじつであつたからであります。

しかし、白い影が、ある人の目に見えて、ある人の目に見えないと、理由りゆうはない。それを見る人は、気候の関係で、また神經衰弱にかかつたからではなかろうかといふ
 ような解釈かいしゃくをした人ひとがありましたが、実際ににおいて、気づく人と気づかない人との相違そういがあるといふことに、ほぼ輿論よろんはきまつたのであります。

そして、いちばん困つたことには、なにか自分の不注意で、失敗しっぱいをしたものが、白い影かげみを見たからといって、ほんとうは、見もしないのに、すべての過失かしつを白い影しろかげきに帰してしまつたことであります。

「白い影しろかげをつかまえることにしよう。」

町の人々まちひとびとは、こう話をきめたのであります。そして、その正体しょうたいを見とどけようと思おもいました。

まだ暑い、夏の時分、野原を白い男がさまよつてゐるときは、大きな雲つくばかりの体でのそりのそりと、真昼の線路を歩いたものであるが、街に入つてからは、小男となつて、晩方から夜にかけて、多く人混みの中に出かけるようになりました。それで、捕らえることは困難であつたのです。しかし、だんだん白地の浴衣を着る人が少なくなつて、みんな人々が黒っぽい着物を着るようになつてから、一方では、やつと白い影を捜すのに都合がよくなりました。

幾日かたちましたけれど、まだ、白い男を捕らえたものはありませんでした。なんでも、このごろは、白い男は、月のいい寒い晩に、町の屋根から、屋根を伝つて、星のよう飛んでいるのを見たというものが、あちらこちらにありました。

「地震があるのではなかろうか？」と、一時は、こんなうわささえしたものがあつた。また夜はなるべく外に出さずに、白い影を見ないものと、早くから戸を閉めてしまうような臆病者も少なくはなかつたのであります。

すると、こんどは、今までとはまつたく違つたうわさがひろまりはじめました。

「今年は、今までないことだ。暴風もこず、米はよくできて豊年だ。昔の人の話に、白い影が入ってきた年は豊年だということだ。」というようなうわさがたちはじめ

ると、

「大河にかかる鉄橋の根もとが腐っていたのをこのごろ発見した。白い影が線路の上を歩いていたのは、それを注意するためだつた。」と、いうような説が、後から後からつづいて起つたのであります。

町の新聞は、また白い影を科学的に批評をしていました。ある理学士は、白い男のように見えたのは、水蒸気のどうかした具合で、人間の形に見えたのであろう。秋から冬にかけては、毎夜のごとく、月のいい晩には、白いもやがいろいろの形で立ち上るものだ。また、夏の日、野原で見た、白い大男というのも、おそらく同一の現象で、雲のようなものではなかろうかといつて、なんでもなく、それを解決してしました。最初、白い男を見て、汽車を脱線させたばかりでなく、自分も負傷した運転手は、神経衰弱から、むだ目が見えたのだと判断されたものの、とにかく汽車を脱線させた責任から退職させられて、いまでは、町に近い港の汽船問屋に勤めていたのであります。

もう秋も末のことになりました。今夜にも、冬がやつてきそうに、空の色は澄んで海の色はさえていました。野原の中の林も色づいて、こずえからは、黄色い葉がひとりでにこ

ぼれるように、ほろほろと落ちていきました。また、街の並木の葉は、たいてい落ちつくしてしまつて、黒い小枝の先が青い空の下に細かく、網の目のように透いて見えていました。

この港から、南洋の方へゆく船は、今夜出てゆくのが今年じゅうの最終であります。したが、あまりそれには乗つてゆく客もなかつたのです。

夕陽は、岡を染め街に沈みかかつています。そのとき、汽船の待合室に、いつかの運転手は、一人の不思議な女をみとめました。

目の美しい、髪のちぢれた娘が、燃えるような赤マントを着て、たつた一人ベンチに腰をかけて、悲しそうな目つきで、海の上をながめていたのです。そして、娘は、手の中に、小さい真つ白なねこを抱いていました。人が近づくと、その白いねこは消えたよう、マントの下に隠れてしましました。そして、だれもそばにいなくなると、また、真つ白なねこは、娘の手の中に入つて遊んでいたのでした。

「この町を騒がした白い悪魔は、こいつでなかつたか？」と、いつか負傷した運転手は、ふと心に思いました。そして、今日、船に乗つて沖へ出ていつてしまつたら、もうこの町に不安はなくなるだろうと思いました……。はたして、それからは、もう白い影を見たものはありませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「白《しら》い影《かげ》」となっています。

入力：ふるぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

白い影

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>